

## 6.平成9年度研究ニズ調査結果と課題化の経過

試験研究要望 課題名	試験研究機関等の意見	実施予定課題名等
	意見	
1.秋まき小麦「ホクシン」の現地普及について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 萎縮病については、平成9年度から「小麦萎縮病の発生実態の解明と緊急防除対策」で試験を開始する予定。</li> <li>・ 「ホクシン」の品質については品質特性上「チホクコムギ」を下回るものではないと考えられたが、全道十数箇所の大規模実証圃(一般農家栽培)で引き続き品質を検討中。</li> <li>また、「ホクシン」の栽培法については、平成7年度から「道産小麦の品質向上(パートⅢ)」で試験中。</li> </ul>	「道産小麦需要拡大のための品質向上促試験」
2.畑作における総合的な技術開発 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ てん菜については将来とも移植栽培は70%あると予想され、省力は重点課題である。紙筒以上の新育苗資材が開発されれば積極的に対応する。</li> <li>・ 自動移植機については今後開発された時点で適応化試験等で対応したい。当面は多畦施肥・移植の一連化収穫期の多畦化を考える。</li> <li>・ てん菜狭畦栽培は十勝農試において実施中。現在移植で55cmの狭畦栽培が網走で600haある。直播では当面50cmをねらって、大豆の狭畦点播密植栽培法と共通の播種期利用を検討したい。</li> <li>・ 2畦用はメーカーが試作中4畦用以上は海外に市販期があるとともに狭畦幅栽培が課題。多畦化に伴い、重量が増すので、適応性について今後要望があれば検討する。てん菜のハーベストについてメーカーにハードの技術があるので、メーカーに委ねたい。適応性について今後要望があれば検討する。</li> </ul>	<p>「てん菜の大規模直播栽培体系の策定」</p> <p>「直播栽培における初期生育障害の解明と対策(てん菜)」</p>
3.畑作における総合的な技術開発 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 簡易耕栽培については現行の課題の中で一部対応。</li> <li>・ 野菜も含めて不耕起栽培技術についてはクリーン農業で課題化を検討する。付加価値については今後とも研究を進める。</li> <li>・ 民間開発技術の導入についてはてん菜、とうもろこし等では民間と協力、共同で進めている。ニンジンでは民間先行。また資材試験等で対応する場合もある。</li> <li>・ ばれいしょの新品種候補には食味テスト、ポテトチップス適性等の評価はしているが、今後はカット・ピール適性を加える必要があり、マッシュ等その他の適性評価法も確立し、様々な評価から利用の多様化を進める必要がある。</li> <li>・ 畑作物の病害については個別に試験が実施されている。ニーズ要望の具体的内容を聞いて細部の対応を考えたい。</li> <li>・ 9年度から上川農試でチコリーの栽培法を開始予定。</li> </ul>	<p>今後も課題化を追求</p> <p>「微生物を活用した環境負荷低減土壌管理技術の確立」で一部実施</p> <p>「馬鈴しょ耐病性品種の育種強化」で一部実施</p> <p>「ジャガイモ半身萎ちよう病防除対策Ⅱ総合防除対策」で一部実施</p>
4.畑大規模栽培におけるてん菜直播栽培体系の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個別技術の総合化、体系化が必要。また、狭畦栽培、それに伴う収穫法について豆類等との播種期の共用化も含めて検討すべきと考える。将来、100~200ha農家が25%出現すると考えられ、てん菜作付25~30haの規模を想定した体系を検討すべきと考える。</li> </ul>	<p>「てん菜の大規模直播栽培体系の策定」</p> <p>「直播栽培における初期生育障害の解明と対策(てん菜)」</p>
5.後志地方における馬鈴しょ・野菜作生産安定、クリーン農業発展のためのてん菜導入による輪作体系の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 十勝農試において「地域基幹」で野菜の前後作を含めて実施中。後志地方の特殊地帯における実施試験対応は糖業者、行政、地元関係者の協力が得られるよう検討したい。</li> <li>・ 秋播小麦が安定的に作付されるよう、萎縮病に対する病理的研究と耐病性の選抜を9年より開始する。</li> </ul>	<p>「ジャガイモ半身萎ちよう病防除対策Ⅱ総合防除対策」で一部実施</p> <p>「道産小麦需要拡大のための品質向上促進試験」で一部実施</p>
6.西洋なしの栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 数年来要望のある課題であり、課題化に向けて検討する。</li> </ul>	「西洋ナシ高品質果実の安定性産技術」
7.「西洋なし」の栽培技術と貯蔵技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近年継続して要望されている課題であり、緊急に解決を要する課題として検討する。</li> </ul>	「西洋ナシ高品質果実の安定性産技術」
8.西洋ナシ栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 数年来要望のある課題であり、課題化に向けて検討する。</li> </ul>	「西洋ナシ高品質果実の安定性産技術」
9.トマト品種比較試験の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ トマトの高品質栽培法を含めた課題で検討したい。</li> </ul>	「加工用トマトの栽培法改善試験」で一部実施
10.道北地域における夏秋トマトのブランド化のための高品質の栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新字型、栽培法品種を含めた、総合的な試験課題を検討したい。</li> </ul>	「加工用トマトの栽培法改善試験」で一部実施
11.果実類(きゅうり、さやいんげん、ピーマン、ミニトマトなど)における作業効率を高めるための整枝方法の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 省力に視点を置いた試験は実施されていない。当面、トマトとピーマンについて課題化を検討したい。</li> </ul>	「労力負担軽減に対応したピーマン高品質栽培技術の確立」

12.ピーマンの仕立て法の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕立て法、品種を含めた検討が必要。</li> <li>・栽培法ならびに出荷方法の作業性・収益性を明らかにする必要がある。</li> </ul>	「労力負担軽減に対応したピーマン高品質栽培技術の確立」
13.ピーマンの短期間収穫栽培法の確立(ハウス促成)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕立て法等の栽培法、品種について検討が必要。同時にピーマンの作業性、収益性を明らかにする必要がある。</li> </ul>	「労力負担軽減に対応したピーマン高品質栽培技術の確立」
14.だいごんの作型別の高品質安定生産技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だいごんの障害については早急に課題化したい問題が多いので、品種特性調査とともに障害に関する課題化を考えたい。</li> </ul>	今後も課題化を追求
15.ながいもにマルチ栽培技術確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マルチ栽培を前提とした栽培技術(施肥量・法、品質を含む)の確立が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
16.野菜(トマト)の省力・クリーン栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マルハナバチの利用について現場先行の現状であるが、適応作物、利用効率とコストなどとともに生態系への影響も考慮したハチの生態的、行動的研究が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
17.メロンに対するマルハナバチの有効性の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マルハナバチの利用については、生産現場が先行しているが、適応作物、利用効果、コスト等とともに生態系への影響も考慮した生態的、行動的研究が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
18.野菜(トマト・メロン)の省力・クリーン栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マルハナバチの利用について現場先行の現状であるが、適応作物、利用効率とコストなどとともに生態系への影響も考慮したハチの生態的、行動的研究が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
19.トマト・メロンの省力、クリーン栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題化を検討したい。</li> <li>・農薬の影響については試験で検討中。</li> </ul>	今後も課題化を追求
20.マルハナバチの有効活用への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・府県の秋～冬のデータはある。本道で春～夏なので、検討が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
21.たまねぎ、ばれいしょ、にんじんなど、道産ものの需要拡大のための前進出荷等栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡易被覆栽培でのタマネギ、ニンジンの前進出荷技術・秋播きタマネギ栽培試験、新品種育成、ニンジン新品種育成で実施中。</li> <li>・春播きタマネギの前進出荷の対策として、早期播種・栽培試験が必要。</li> </ul>	「出荷時期拡大に対応したタマネギ品種開発の強化」で一部実施
22.野菜(トマト・メロン)の省力・クリーン栽培技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マルハナバチの利用について現場先行の現状であるが、適応作物、利用効率とコストなどとともに生態系への影響も考慮したハチの生態的、行動的研究が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
23.スターチス・シヌアータの長期採り栽培法の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期どり作型における夏期の品質の品質向上、秋期の安定生産のためのかん水法、施肥法などの確立が必要。</li> </ul>	今後も課題化を追求
24.ラクスパークの新作型開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋切り作型は本道の特徴を生かせるもので、府県市場の要望も強い。また、「CO-1」の普及を図る点でも秋採花の特性を明らかにする必要がある。</li> </ul>	「ラクスパークの作期拡大技術の確立」
25.球根花きの開花調節技術の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花ユリについて試験中。</li> <li>・フリージャ、チューリップについて課題化を検討したい。</li> </ul>	「花ユリ病害抵抗性素材作出のための遺伝子組み換え技術の開発」 「新しい地域特産花きの選定と導入」で一部実施
26.和牛枝肉生産におけるキメ・シマリ・色の改善に関する飼養管理ポイント(技術)の解明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「北海道型黒毛和種肥育技術(暫定基準)の緊急開発・飼料給与マニュアルの策定(H7～9)」</li> <li>・「道産牛肉の肉色に関する実態解析」(H7～9)で一部を対応</li> </ul>	「北海道型黒毛和種肥育技術の開発」
27.稲わらロールベールサイレージの乳雄肥育牛への給与効果および上質肉生産の給与方式	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題化を検討したい</li> </ul>	今後も課題化を追求
28.低コスト草地更新法の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題として検討</li> </ul>	今後も課題化を追求
29.乳牛の生涯生産性の向上について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アミノ酸バランスを考慮した乳牛の蛋白質飼料給与改善試験」(H9～13)、「大規模土地利用型酪農における省力的群管理技術の開発」(H6～10)、「乳牛の起立不能症予防法確立試験」(H9～12)、「生理活用物質による感染防御機能増強とそれを利用した乳房炎予防」(H6～10)で一部を対応中。</li> </ul>	「乳牛の供用年数延長による酪農経営の低コスト化技術の開発」
30.自動搾乳(搾乳ロボット)システムの実用化について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早急に現課題を拡大したい</li> </ul>	「先端システム導入調査研究」

31.高泌乳と疾病との関係	・重要な問題として課題化を検討する。	「乳牛の供用年数延長による酪農経営の低コスト化技術の開発」
32.トマトに対する肥料の種類別肥効の確認	・露地畑、水田等における有機質肥料のN放出特性はほぼ出ているが、施設土壌における評価は不十分である。クリーン農業確立のためにも課題化を検討したい。	「環境負荷軽減をめざした園芸作物の高度肥料利用技術の確立」、「周辺利用型ハウスにおける土壌診断法の策定」で一部実施
33.ハウス内の連作障害に対応する簡易な方法(現況、客土等、土の入れ替え)or 対策・・トマトほうれん草等	・太陽熱消毒、灌水、薬剤による土壌消毒などいろいろ検討され、成果も挙がっている。しかし、クリーン農業の観点から周年土壌管理についての検討は必要と考えられ、クリーン農業技術開発試験の中で課題化を考えたい。	「周年利用型ハウスにおける土壌診断法の策定」で一部実施
34.高リン酸蓄積圃場の施肥改善	・当面H1発表の資料で対応可能と考えられるが、ハウス土壌の周年管理技術は確立しておらず、リン酸に限定せず総合的な実態の把握を含めてクリーン農業技術の一環として課題化を検討する。	「周年利用型ハウスにおける土壌診断法の策定」で一部実施
35.食品製造業者が原料として使用する野菜類の貯蔵技術の向上	・自然冷熱エネルギーとしての雪と氷利用による貯蔵技術は地域環境にやさしい技術の1つである。野菜への利用として長期貯蔵と短期貯蔵と分けて、それぞれにふさわしい作物を選択する必要がある。収穫後の生理の研究と施設の熱効率、コストの問題とともに研究の必要性がある。	今後も課題化を追求
36.低コストで品質が保持できる輸送体系の確立	・各野菜に必要な予冷条件は既に基礎研究の成果として得られている。最近では、輸送手段が高度化したり、冷蔵コンテナの普及といった過去の試験時には整備されていなかったシステムができあがっている。従って新しい器に盛る意味での試験は必要である。また、環境に配慮して、発砲スチロールを使用しない資材での試験も必要である。圃場から出荷までの温度管理については現在実態調査を進めている。 ・重要課題であるが、当面関連部門、行政とも協議して課題化の可能性をふくめた調査を行う。	今後も課題化を追求
37.いもち病菌のレース変化と防除対策	・早急な対策が必要と考える。	「水稻いもち病緊急対策試験」
38.秋播小麦褐色雪腐病の防除法確立	・課題化を考えたい。 ・品種課題については調査を続けたい。	「コムギ褐色雪腐病防除対策試験」
39.小麦赤かび病の効率的防除	・課題化を検討する。	「小麦の赤かび病の被害解析と防除体系確立試験」
40.メロンのエソハンテン病抵抗性の品種間差について	・品種の抵抗性検定を含む、総合的防除対策の検討が緊急に必要と考えられる。	今後も課題化を追求
41.メロンえそ斑点病の防除対策	・品種の抵抗性検定を含む、総合的防除対策の検討が緊急に必要と考えられる。	今後も課題化を追求
42.メロンのナスハモグリバエの防除	・発生生態は一部明らかになっている。新資材試験の中で対応していきたい。	今後も課題化を追求
43.トマト灰色カビ病に対する新規農薬の検討	・耐性菌の種類つまりどの薬剤に対して耐性なのかを調査する必要がある。	資材試験、受託試験で対応
44.レタスの新病害「ナモグリバエに対する防除法の確立」	・早急な対策が必要と考える。	今後も課題化を追求
45.ほうれんそう・こかぶ・チンゲンサイなどの連作障害回避のための総合対策の確立	・課題化を検討したい。	今後も課題化を追求
46.にんじんの乾腐症状の解明と防除対策	・平成10年度新規課題候補として取り上げたい。	今後も課題化を追求
47.ごぼうの病害虫防除法の確立	・実態調査が必要である。登録促進については行政要望。	今後も課題化を追求
48.ごぼうの黒条病の防除方法の確立	・発生実態の解明が必要である。	今後も課題化を追求
49.ごぼうのくろすじ病防除法の確立	・種類と生態を究明中。花野センターとの共同研究を模索。	今後も課題化を追求
50.作物の生育量に応じた農薬・水量の適正な散	・生育時期別適性散布量を求めたい。	今後も課題化を追求

布方法の確立		
51. マルハナバチの有効活用利用マニュアルの作成	・マルハナバチは害虫でも生物農薬でもなく、資材扱いなので、マニュアル作成には栽培との協議が必要。マルハナバチの問題の取り上げ方を含めて課題化したい。	今後も課題化を追求
52. ミツバチ、マルハナバチに影響する農薬の検討	・各薬剤の影響期間、マルハナバチの被害	今後も課題化を追求
53. 米の広域産地化が経営に及ぼす効果	・極めて重要な課題と考えるので積極的に課題化に取り組みたい。できれば産地規模だけでなく、特栽培米への取り組みや、産消提携の問題も取り上げたい。	「広域米産地の販売戦略と運営方式」
54. 輸入農産物に対抗するための十勝地方における低コスト農産物流通システム条件の確立	・経営部門の研究体制は、稲作、畑作、酪農の3地帯に配置しており、畑作物も含むのであれば課題化に取り組みたい。	今後も課題化を追求
55. 観光農園の実態とその経営成立の諸条件	・多角的経営体の1つとして観光農園もおもしろいが、りんご部門とすることを前提とした研究は、経営の選択肢を限定するので、成立条件そのものが存在しなくなる恐れがある。経営の基幹作目をりんごに限定しないで、多角的経営体(自営兼業)の成立条件として、課題化したい。	「消費者直結型産直の発展方向と産地対応のあり方」で一部実施
56. 乳牛の供用期間延長を可能にする技術開発と経済効果について	・第3次酪肉近計画における生産コスト削減には乳牛供用年数の増加は非常に有効である。従来までの技術対策が何故十分な効果を挙げてこなかったのかも含め、経済的要因と技術要因の解明とこれを踏まえた総合的な研究が必要である。技術研究とセットで課題化したい。	「乳牛の供用年数延長による酪農経営の低コスト化技術の開発」
57. 移出農産物輸送における出荷拡大の可能性と産地対応のあり方	・都府県農業の後退、道産移出農産物のシェアが増大傾向にあるが、消費サイドからは割高な物流費用の低減要請が強くなっている。また近年急増している輸入農産物との競争上も物流費用の低減が必要であり、課題化したい。	「消費者直結型産直の発展方向と産地対応のあり方」で一部実施

[目次へ戻る](#)